

Title	西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(上) : 集落の移動と生活空間
Sub Title	Preliminary reports of the archaeological and ethnological survey on the British Solomons : archaeological study on the changing of life environments I
Author	近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.2 (1965. 10) ,p.123(277)- 141(295)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告 Contentsのタイトル : Archaeological study on the changing of life environments I
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651000-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報（上）

—集落の移動と生活空間—

近森正

はじめに

I・位置と現状

II・調査の概要

- (一) 集落遺蹟の発掘調査
- (二) 配石遺構の調査
- (三) 灌溉遺蹟の調査
- (四) 洞穴遺蹟の調査
- (五) 土器つくり部落の調査
(以下次号)
- III・集落の移動と生活空間

IV・展望

（一）現在の集落

（二）集落の成立を物語る伝承

（三）過去の集落

（四）生計活動とテリトリー

- a. 農耕及び果実栽培と採集
- b. 漁撈と貝類の採集
- c. 狩猟

（五）生活空間の配置的関係

（六）より大きな地域圈とのかゝわりあい

を行なった。

はじめに

慶應義塾大学考古学・民族学研究室は、一九六四年七月に南太平洋メラネシアに調査隊を派遣して、八月から十月にわたる約二ヶ月間、ソロモン諸島西北部の島々において、民族学及び考古学的調査

調査隊の一一行は、文学部講師伊藤清司氏を隊長に、文学部学生高橋昭雄君それと私。サンケイ新聞社から石川真記者と服部良己カメラマンが同行した。伊藤隊長が民族学的調査を行ない、私は、主として考古学的な調査を担当した。従来、考古学的調査が、この地域

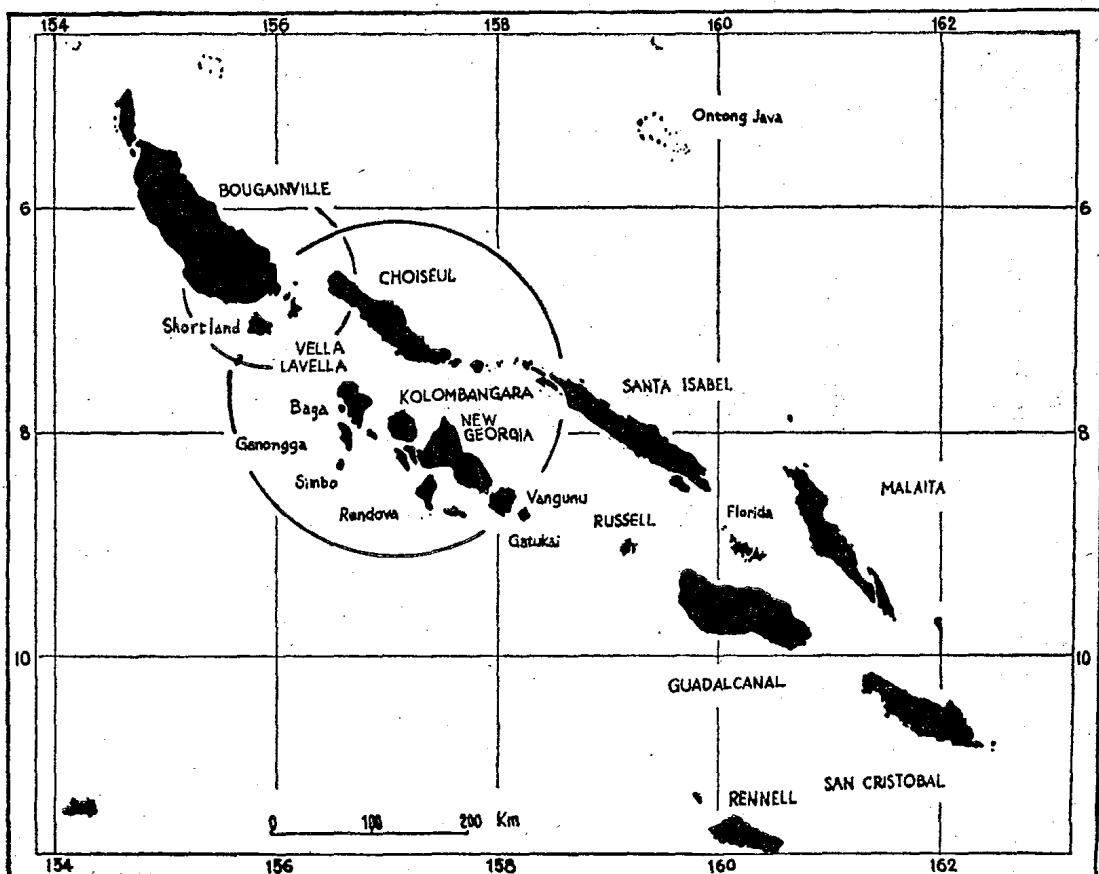


Fig. 1

ソロモン諸島

大円はルビアナ語文化圏

小円は土器文化圏との関係を示す

で行なわれたことはなく、これに関する情報を全く欠いている現状では、今回の調査は予備的調査の段階を越えるものではない。そのため現地における遺蹟の発見、踏査は、困難を極めたが、今後この方面からする調査の重要性を認めることができた。調査を終えて帰国してから、まだ僅かの日数しか経ていない今日、茫漠とした旅の印象が、頭の中を去来して、まだまだまた考えを得るに至っていな。個々の問題に関する調査報告は別に発表の予定であるが、こゝではとりあえず、予備報告として、フィールド・ノートの一部を整理し、調査の概要を記すとともに、メントの中でもまとめた、いくつかのアイデアを提示して、今後の資料整理のための作業仮説を出しておきたい。

今回の調査にあたつては、慶應義塾当局、およびサンケイ新聞、ソロモン（南方）林業、三井物産、大和海運はじめ、味の素、東芝商事、服部時計店、白木屋、マミヤその他の各社から多大の援助をいただいた。また、慶大文学部からは、学部長今宮新先生、松本信広先生、清水潤三先生、江坂輝弥先生はじめ諸先生方、それに東洋史学科の学生諸君、考古学民族学研究室の皆様には、出発の準備から帰国後の整理にいたるまで種々お世話をいたゞいた。篤くお礼を申し上げる次第である。

I 位置と現状

ソロモン諸島は、西北より東南にのびる内外二帶の島列より成り、その全長約九〇〇マイル、南緯五度より十一度、東経一五四度四〇分より、一六〇度三〇分の間に位置する。外帶には西北より東南へ Choiseul, Santa Isabel, Malaita, San Christobal など、内帶には Buka, Bougainville, Vella Lavella, Kolombangara, New Georgia, Rendova, Vangunu, Russell, Guadalcanal などの島々が連なっている。この内帶は西北端を Buka, Bougainville が行政的にオーストラリア領に属しておらず、他の半球の東南貿易風圏内に入り、その期間内に年間最低気温が示される。十一月から四月にかけては、赤道常雨帯の中に入って、最高気温と最高雨量がこの季節に記録され、且つして強い北西風が吹かれる。八月。年間平均気温は、七九・八六度 (F) 平均雨量八一・三一インチが、Honiar (Guadalcanal) で観測された。 (原住民の方位を示す用語には、東南と北西に対応するものが、中心になっていたことは、列島の島軸との風向に基くものであると考へられる。)

ヨーロッパ人にもソロモン諸島の発見は、一五六七年ペニーの Callao を出発したペグヘー人 Alvaro de Mendana de Neyra がその翌年に Isabel 島を発見したのが最初だと云われてゐる。原

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(上)

(1179) 111H

住民は、大部分がメラネシア系に属するが、その中には、タイプにおける多くの差異を含み、言語についても、そこには六十を超える地方語があり、島ごと、部落ごとに言葉を異にする。人口は、一九六三年の推定で、メラネシア原住民約一一三〇〇〇、ポリネシア系原住民約五〇〇〇、他にヨーロッパ人と中国人を含めて全人口は約一三〇〇〇〇人と推定される。ギリスの統治領は Honiara 本島を除く Western Pacific High Commission 領域に属し、Gizo を中心とする中部地区、Auki に本局を置く Malaita 地区 Kira Kira を中心とする東部地区の四地区に分かれている。キリスト教は一八四五年以来、次第に浸透し、現在では Roman Catholic Mission, Melanesian Mission, Methodist Mission, South Sea Evangelical Mission, Seventh Day Adventist Mission などが活動しているが、ややわらじて興味のあるのは、太平洋戦争以後、アメリカ・リグロの影響を受けて Methodist の一派から、原住民の手によって独立した C.F.C 派の活動である。

まだこのくだりに、この地域における考古学的な調査は、まだ行なわれたことがない。民族学的な調査は、Buka 島、Bougainville 島、Malaita 島などに行なわれてゐるが、西部ソロモン諸島 Carl Ribbe, H. B. Guppy, G. C. Wheeler など Shortland, Fauro, Treasury 島なども調査があり、A. M. Hoccat が Simbo 島における調査を開始してゐる。また New Georgia 島の C. Ribbe, B. T. Somerville,

A. Capell の簡単な記録がある。なお、われわれがソロモン滞在中に、たまたま Wagina 島で、移住 Gilbert 島民の社会人類学的な調査を行なつていた アメリカ Oregon 大学の若い大学院学生、William T. Stewart 君夫妻の仕事は、非常に興味深いものである、その成果に期待したとと思つ。また、Bougainville 島 Siuai の社会組織の研究で、割期的な成果を上げた Douglas L. Oliver の研究は、現在もなお継続しており、われわれは Munda において、その研究メンバーの一人、Harvard 大学 Peabody 博物館の Eugene Ogan 氏に会う機会を得、アメリカにおける太平洋研究の動向について情報を得ることができた。

II 調査の概要

(一) 集落遺蹟の発掘調査

対象 集落址

調査地 Vella Lavella 島南西端 Veala ドラムモル Tu'umbuo ド

調査期間 一九六四年九月十一日 (Veala ド遺蹟予察)

九月二十七日～十月一日 (Veala ド遺蹟発掘調査)

十月九日～十一日 (Tu'umbuo ド遺蹟予察)

十月十一日 (Veala 神殿調査)

十月十三日～十四日 (Tu'umbuo ド遺蹟発掘調査)

位置 Vella Lavella 島西岸の略中央部、Baga 島の対岸にある

Paramata 部落の後背丘陵には、標高九〇〇米の Onji ドを最高

に、熱帯降雨林におへられた標高五〇〇米から一〇〇米ほどの無数の起伏が連らなつてゐる。Tu'umbuo ドは Paramata 部落の北、直線距離にして約八糠米、島の両側からほど等距離の山地中央に位置する。標高は約七五〇米。Paramata からカヌード・アングローブの密生する Sand fly Bay へかかるばかり、カヌーをかて約五時間、ジャングルをのぼりぬいて到達する。Veala ドは Paramata 部落の北、直線距離約三・五糠米の位置にあり、Paramata から約一時間半登りつゝかけて、標高約三〇〇米の山頂に達する。さて Veala 山遺蹟を中心に記載する。

立地と景観 Paramata 部落の位置する海岸低地をあとにして、焼畑農耕地の点在する後背斜面をのぼりぬると、板根や支柱根をもつ巨大な樹木の茂る熱帯森林特有の暗がりに入る。トバエの羊歯類をかきわけ、蔓をくぐりぬけ、山稜に近づくと、のぼりは一段と急斜面にかかり、樹木は幾分矮小化し、細いものが目立つようになる。山頂から尾根にかけては直徑が二〇糠をこえる樹木が殆どみられない。一面、叢林がひろがつていて、こねゆる第一次林を形成していることと似てゐる。樹葉を切り払つと、薄暗い林間に、強い光線がさしかかる。正面に Baga 島を俯瞰することができる。このような立地は、過去の住民が、外敵の襲来から安全な感を得るのに、たしかに意味をもつていたと思われる。住居址は、この山頂部と、そこの分岐してのびる尾根の上に点在し、傾斜変換部を中心にできた平坦面に密集して分布している。

発掘 発掘作業は、Paramata 部落の成年男子十～十三人を使

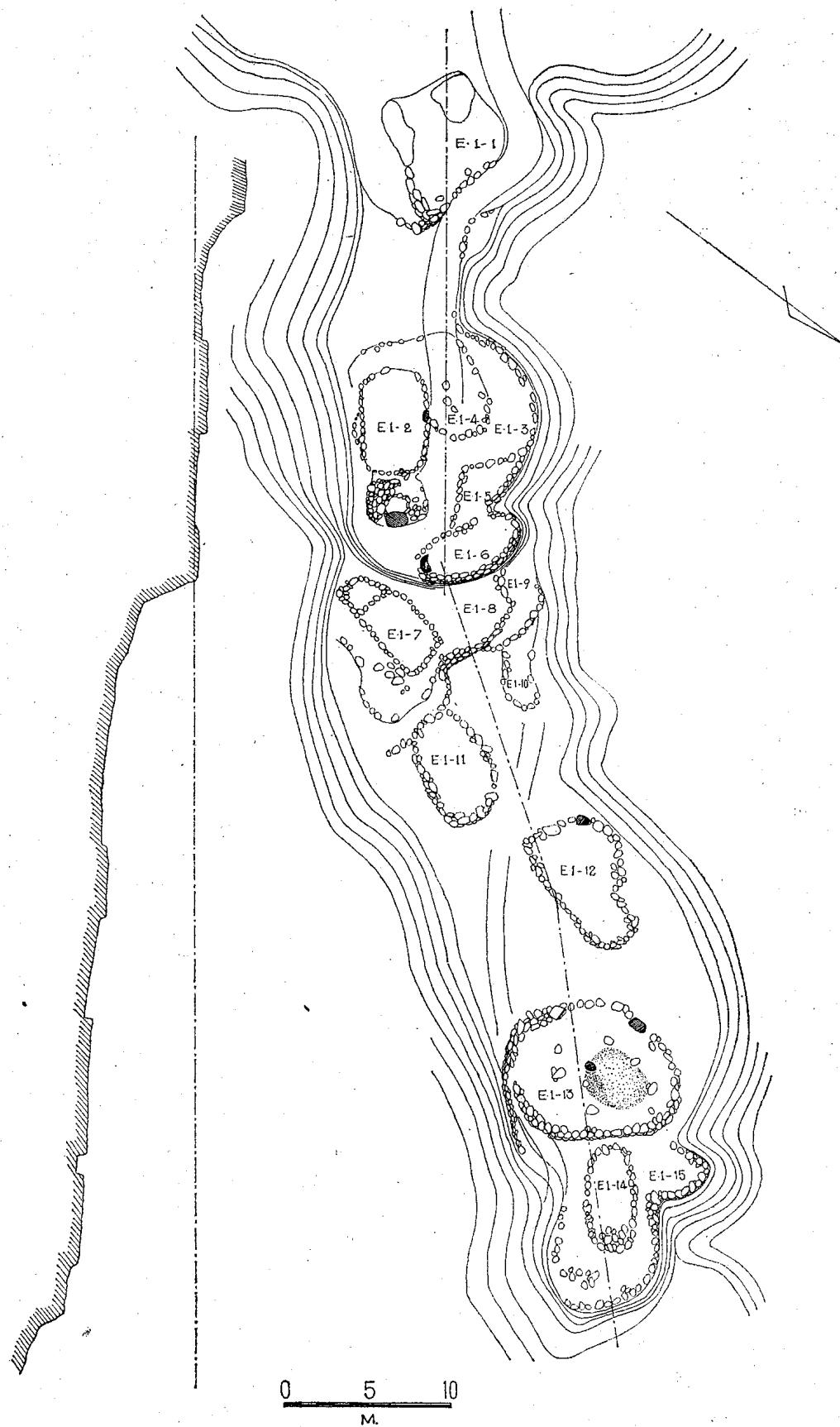


Fig. 2
Vella Lavella 島 Veala 山集落遺蹟
E1 セクション

つて、まず山稜全面を覆っている叢林を切り到し、下ばえの植物を払うことからはじめられた。個々の住居址は、通常、土を堆積し、周囲に礫を積み上げて囲っているので、住居址の所在については、作業が進むにつれて、ほど見当がつけられる。それから、これにトレンチを設けて、土の堆積、石積みの構築などに注意をはらいながら遺物の採集と、炉址の確認を行なった。トレンチは、はじめ巾一米のものを十字形に設定し、遺物の包含状態、炉のひろがりを中心適宜に拡大した。

住居址の形態 われわれは Veala 遺蹟において、合計四八戸の住居址を発掘し、記録をとることができた。住居址は、おもむね高さ三〇糰～二米に土を堆積し、周囲を直経二〇～四〇糰の円礫で積み上げた、いわゆる家屋の基壇をなすものである。柱穴は認められなかつた。これを、平面プランによつて、三型式に分類することが可能である。

A型式（円形住居址） プランが、ほど円形をなすもので、他のタイプに比して大きく、直径八～一七米。

B型式（方形住居址） 長方形をなし、小さいもので四×二米、大きいもので八×五米。

C型式（楕円形住居址） 規模その他の点でB型式に類似するが、

四つの隅が明瞭でなくどちらかといえば楕円形をなすもので、大きさはB型式と殆ど同じで、小さなものは二×五米、大きいものは八×四・五米。発掘の結果、これらのうちA型式の円形住居址には、かならずその中央部附近に炉址が発見された。しかし、他の二型式

には一例を除いて、炉址を全く伴なわないことが判明した。

住居址群の構成 調査によつて Veala 山遺蹟における住居址は以下の如くグループをなして四つのセクションに分れていることが明らかになつた。

(Tセクション) 山頂平坦部の東側の一隅約一〇〇〇平方米の区域。高さ三〇糰、直径一四米の円形住居址を中心に、その東半分を廻ぐつて、方形住居址が七戸配置されている。この円形住居址(T-1)は、われわれが最も綿密に発掘を行つたものの一つであつて、プランは殆ど円形に近い。約二〇米の厚さの腐蝕土を全面にわたつて除去し、トレンチを設定した結果、その略中央部四・五×六米の範囲に黒色の焼土が、直径一〇～一四糰大の多くの礫に混つてひろがつており、その堆積は最も厚い部分で、約五〇糰、周辺部に向つて薄くなつてゐる。これは明らかに炉址であつて、混在する石片が、いわゆる Cooking stone であることはほど間違はない。このようないく認められなかつた。

(E1セクション) 山頂平坦部から、北東に下降しながらのびる巾一〇～一五米、全長八十米の稜線上の区域。このセクションにおいて確認し得た住居址は一五戸であるが、二つ以上の住居址が複合していると思われるものが三ヶ所でみとめられた。円形住居址が、最も下端部の平坦面にあつて(E1-13)、他は楕円形住居址と方形住居址一四戸が尾根の軸に沿つて列状に並ぶ。こうした配置はTセクション及び、他の二つのセクションと異なつてゐる。(E2セク

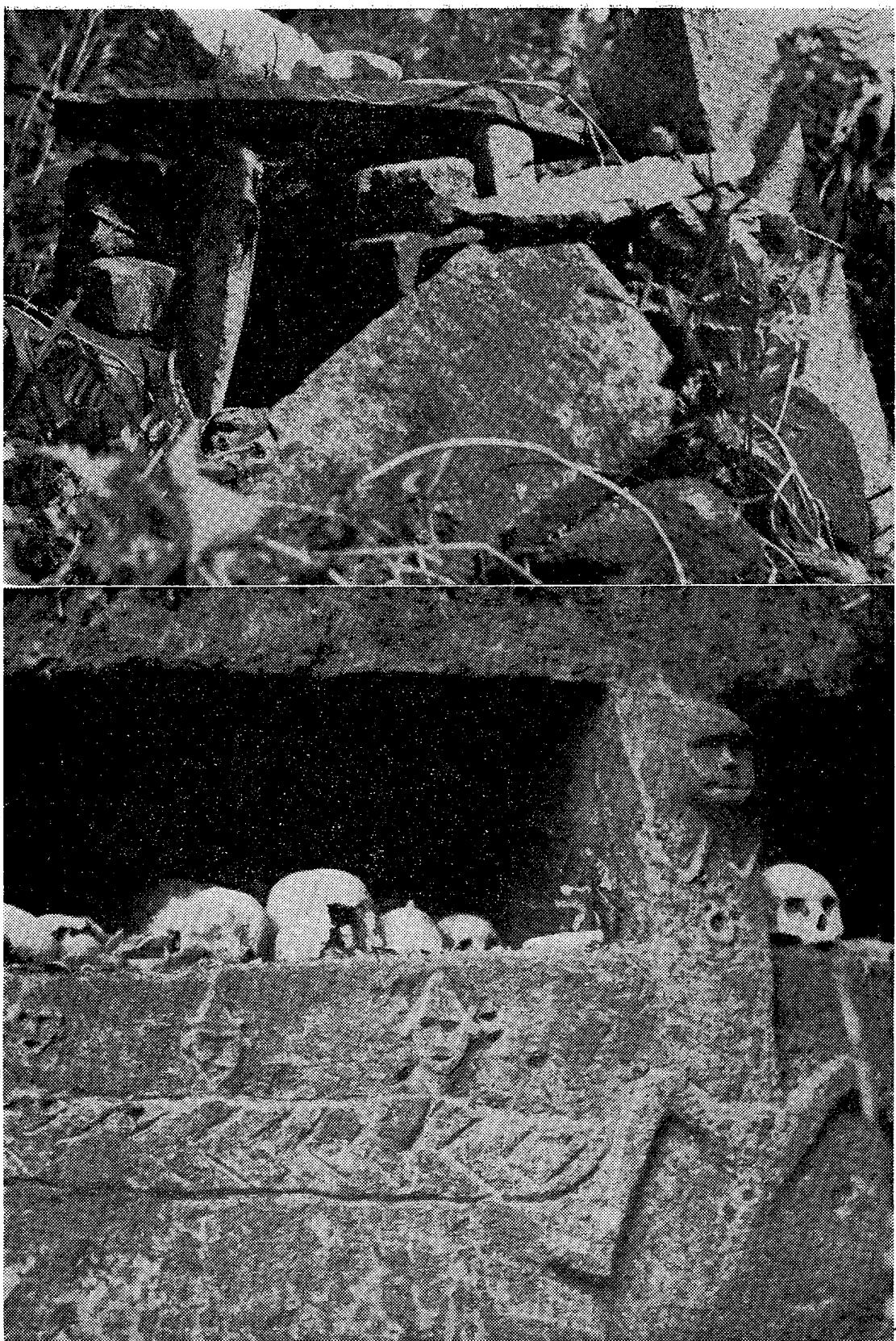
ション) E-1セクションを構成している尾根が、下降して鞍部をつくり、再び五米程高度を上げたところ、その間隔距離約100米のところに位置する約八五〇平方米の平坦部上の区域。直径約十六米の円形住居址がこの平坦部の南端を大きく占め(E-2-1) その北側を方形住居址九戸が、とり囲むように配置されている。このうち、E-2-2は、二つの住居址が複合している可能性がある。円形住居址の中央部には石廻いがみられ焼土の堆積が著しい。

(E-3セクション) E-2セクションの東側につゞく約三十米を距てた平坦部、約一〇〇〇平方米E-2セクションを含む平坦部が東側へ舌状にはりだした区域。この舌状地形のほゞ中央部に、直径九米の円形住居址が位置を占めている。(E-3-4) この住居址は、ほゞ中央部に著しい炭化層の堆積をもつとともに、西側に二・五×二・五米の敷石の方形部分をつくり足している。これをめぐって方形住居址一三戸と、直徑四・五米のマウンド状特殊遺構が配されている。

以上の如き四つのセクションを通じて、共通する重要な所見は、それぞれ住居址のグループが、かならず、炉址をもつ円形住居址一戸と、炉址をもたない七・一四戸の方形または楕円形住居址によって構成され、しかも、他に比べてやゝ大型の円形住居址が、そのグループの中心をなすようなかたちで成り立っている点であろう。こうしたセルメント・パターンの示めすものが、何らかの機能的な意味をもっていたことを充分に示唆するものがある。すなわち、(1) 円形住居は、現在の部落がもつてゐる炊舎^{ツッキン・ハウス}に相当する機能(調

理をする所)をもつていたと同時に、一つのセクションに属する住居の人々によつて共有されていたこと。従つて、それは火の共同使用ということであり、それとともに会合や、死者の安置などに用いられたと推定される。(2) これに対し方形住居址や楕円形住居址は、いわゆるリヴィング・ハウスとしての機能を果していたと考えられる。

Turumbuo 山遺蹟では、五戸の住居址を発掘したのみで、Veala で行なつたような全面的な調査を行なうことができなかつたため、こゝからすぐに、セルメント・パターンを抽出することはできな。しかし次の点については Veala 山遺蹟と比較することが出来る。1・遺跡の立地は両者に共通している。すなわち山頂平坦部と尾根上に住居址が分布する。2・山頂周辺部に関する限り、集落グループは、一つしかみとめられない。3・円形住居址について Veala 遺蹟のものと、形態と規模の点で、全く類似する。4・他の住居址は、Veala 遺蹟 E-1セクションの楕円形住居址と共通する。方形住居址はみられない。



Pl.

- 上. ドルメン型式の配石遺構
Vella Lavella 島 Teterana
- 下. 洞穴型式の頭蓋骨家屋
Vella Lavella 島 Lunga

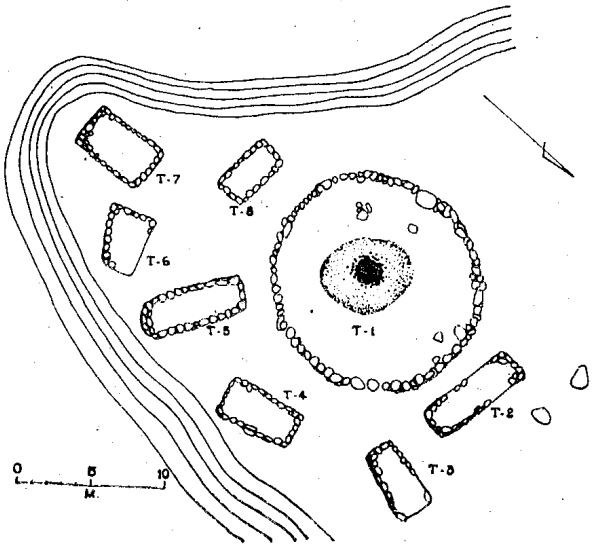
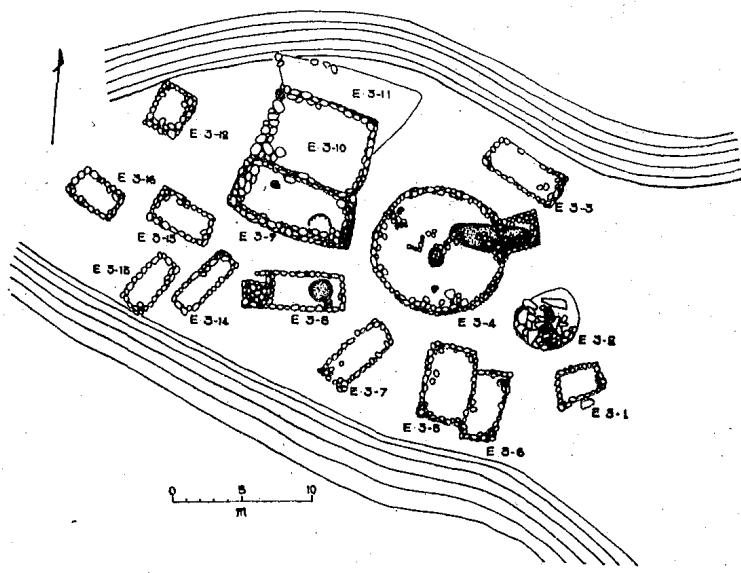
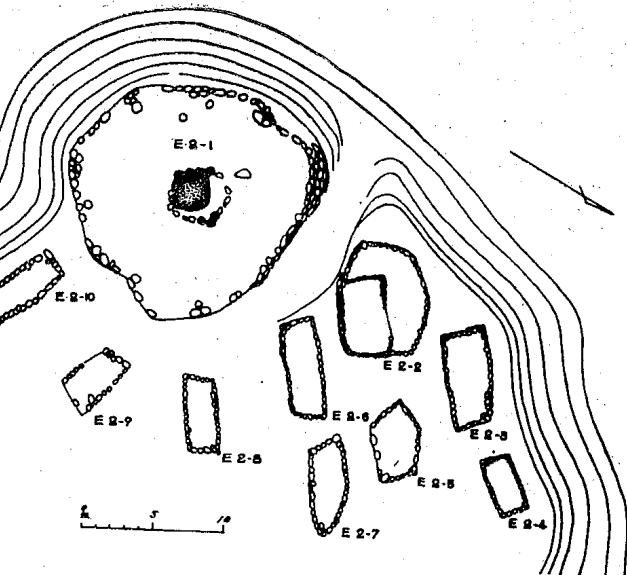


Fig. 3
Valla Lavella 島 Veala 山集落遺蹟
E2, E3, T セクション

民の食生活を考える上で、非常に貴重な収護であった。

(石斧) 磨製石斧、E1セクションNo.2住居址のほど中心部、深さ二十三釐の部分から出土した。全長十五・七釐、断面はほど円形で円筒石斧に近い。全体として粗雑な感を与える。

(貝輪) E3セクションNo.2特殊遺構から出土したもの。半分を欠く。シャコガイ製。

(凹石) 扁球形、こぶし大の礫器の片面または両面の中央に浅い、

西部ソロモン諸島における考古学的調査の概報(上)

(二八五)

一三一

くぼみを有するもの。安山岩質のものが多い。これは、次にのべる雨垂石と対をなすもので、ナツツの堅皮を破碎するときに用いられる。出土した遺物の中では最も多く、約四〇点を数える。

(雨垂石) 一定の形はみられないが、大体において直方体を基本とし、石英粗面岩などの表面に多数のくぼみや、小穴をつけたもので、凹石より重量があることが原則になっている。E1セクションNo.2住居址では、一邊が一米を越える、大形のものがあった。現在の

Paramata 部落では Kamu ハモバ^ハ石^ハ、 Viruruli Rimamu トヨダ^ハ垂^ハ石^ハを用いて、大型のナツツ Mambanene の堅皮を割る。

これらは、遺蹟から出土したものと全く同じものである。また、小型のナツツ Patinene は、方形で穴がなく、平板な表面をもつ石の稜に、これをあてがい Patukamu ハモバ^ハ、木柄のついた乳棒状の石槌で割る。一回の動作で、一個のナツツをたゞき割り、一間に四五〇個を割る。

(石皿) 平面形が橢円にちかい、大形の扁平な石塊の表面に浅いくぼみをつけたもので、イモ類や、ナツツを磨りつぶしたり、捏ねたりするときに用いたものと思われる。安山岩、または石英粗面岩製が多い。発掘の結果、円形住居址すなわち、炉址とともになう住居址からは、殆どこの石皿が発見されたことは、非常に興味ある所見であるように思う。

(磨石) こぶし大または、それ以下の球状、あるいは、扁球状の安山岩質の石器。石皿の上で、ものを磨りつぶすために用いたものと思われる。凹石^ハとならんで、非常に多く出土し三〇数点を得た。(砥石) 砂岩質の不整形の石片を用いたもので、半円形に磨耗したものがある。磨石斧や貝輪の製作に用いたものと思われる。なかには石皿の裏面を利用したものもある。

こうした石器類のセットは、主として、その用途を、イモ類の加工、植物種子の打割など、植物性食品の処理加工を目的としたものからなり、山間集落における食生活の基本が、こうしたものにあつたことを想定させる。

(ガラス片) 濃緑色のガラス片三点。E3セクションNo.8住居址床面から出土した。

さて、この山頂の集落が、何時ごろ成立したかという、いわゆる上限年代については、まだ何ら具体的な手がかりを得るにいたっていない。また、遺物の型式学的な検討を終えていない現在、そこに型式学的な時間差を求めることができない。Tu'umbuo と Veala E1セクションのみに橢円形住居址がみられることは、伝承にもとづく限り、方形住居址より古いことになるが、確実なものとはいえない。そうした中で E3セクションNo.2住居址より出土したガラス片のもつ意味は、極めて大きい。すなわち、それが直接的あるいは間接的に、ヨーロッパ人との接触を物語つており、集落の一部が、少くともその前後ごろまで、當まれていたことが明らかである。一五六七年に Mendana が最初の外来者として、ソロモン諸島の海域に足を踏み入れてから、一八四〇年代には、すでにヨーロッパ人商人が、現われはじめ、Vella Lavella 島には一九一二年にキリスト教の最初のミッションが入ってきている。このような点を考慮に入れて、山間集落の下限年代が、ヨーロッパ人との接触前後、すなわち一九世紀中葉から今世紀のはじめ頃にあつたことが推定されるのである。

発掘によつて明らかになつた、これらの住居址のすべてが、過去のある時点で、同時に存在したと判断することはできない。また、人口規模についても、明確な推定の基準はない。たゞ、伝承によれば、山間の集落には、四〇〇人位の住民が住んでいたといわれる。

これは、女と子供を含まず、いわゆる戦闘要員の数を示めしているから、当時山間には、相当な人口を擁していたと考えられる。

(二) 配石遺構の調査

対象：若または田礫や平板な石、珊瑚石を使用して構築された宗教的な遺構、及び機能的にこれと関係があると考えられる頭蓋骨家屋。原住民はそれらの位置するところを、おしなべて Tanbuna (聖域) と呼ぶ。

調査地：Ganonga 島 Mondo, Simbo 島 Panahudu 島、Nusa-Simbo, Choiseul 島 Malagano, Vella Lavella 島 Paramata, New Georgia 島 Visu Visu

調査期日：一九六四年八月三十日～十月十一日

この種の遺構は、現在キリスト教化した住民の精神生活に、あい入れないものとして、その社会的文化的機能を殆ど失なっているが、それらの位置する場所、それらに伴う伝承などは、四十年代から五十年代以上の住民の記憶のなかに、じくいかたどることができる。

われわれが踏査し、実測、資料の採集をし得たもの：Ganonga 島十二例、Choiseul 島八例、Simbo 島二十八例、New Georgia 島四例、Vella Lavella 島六例。合計五八例にのぼるが、これらを

型態と、それが持つ機能を考慮して分類を試みるに以下の如くである。（なお、以下の分類は漸定的なものであって、本報告の場合には、さらに検討を要するものである。）

(1) 積石遺構 直径三十厘米前後の自然の田礫または珊瑚石を積み上げて直徑約五米高さ一米の田形ないし橢円形プランのマウンドを築くものであって、そのマウンドの頂上に附属する施設物によって次のように分けられる。(1A) マウンドの頂上に自然石または一部加工した柱状の石をメンヒル状に立てたもの。(1B) 一邊が約八十厘米前後の平石を三枚の平石、または柱状石によつて箱状に支えたもので、ドルメンの形式を思わせるもの。(1C) 積石のマウンドの上に何らの施設をもたないもの。これらは多くの場合、その頂上に頭蓋骨を配置し、殊に 1B 型の場合には、そのドルメン状の施設の中に、かならず数個の頭蓋骨を配している。なお、Choiseul 島 Malagano の後背山地 Lopozinaka では、土器を容器とした一種の甕棺葬が発見された。

(2) 環状配石遺構 自然の田礫または柱状の石を環状に配置した一種のストンサークルと考えられるもの。ほゞ中央に立石をもつものがある。

(3) 独立した巨大な自然の岩、あるいは粘板岩質の崖面を利用し、その側面を祠状にえぐり、その中に頭蓋骨を配したもの。この種のものには、岩の壁面に浮彫による人物像や絵画を施したものがあ。

(4) Sope または Hope と呼ばれる、いわゆる頭蓋骨家屋(4A)非常にすぐれた彫刻を伴う木製の家屋形の祠であつて、機能的に 4A を単純化したかたちとみられる鳥箱状のもの。(4C) 平板な石を組み合せて棚状に作ったもの。これらは、すべて内部に頭蓋骨

を配し、木製家屋形のものには、数十個の頭蓋骨が入れられてゐる。

以上の諸型式の中で、(1-B)と3・4型は、かなげ頭蓋骨を伴い、そこに機能的な共通性があることが考えられる。しかし、他の場合には、流星の信仰などとむすびつてあるものがある。

副葬品：頭蓋骨を伴う遺構には、副葬品と考えられる貝製加工品が、同時に配される場合が多く、そのじゅつかの資料を得るものができた。すなわち、貝貨、シャコガイ製のすかし彫り、Raga Sake シャコガイの背部に穴をあけたものが原形であるといわれる半円形の貝製品。(海の貝が、ワニとともに善神と考へる思想にその意義をみることができる) 貝製腕輪、貝斧など。なお、これらの遺構に置かれた頭蓋骨は、メラネシア・タイプの長頭型を示しており、その中に人為的変形や装飾は、とくにみられなかつたが、頭蓋骨内部にナツツの実をつめたもの、眼窩内に、イモガイを横に切断したもののはめこんだものなどがみられた。

立地：次にわれわれが集中的に調査を行なつた Ganonga 島 Mondo, Choiseul 島 Malagano, Simbo 島、Vella Lavella 島 Paramata などにて遺構の分布と、立地をみると、これらに共通していえることは、海岸低地、岬などの海岸線に近いところ、あるいは海岸に近い台地の上、見はるしのよい高い丘背斜面のテラス状台地などに、その立地点が限られてゐることである。それは恐らく、彼らの靈魂観と無関係ではないだろう。次の採集事例は、これを充分に説明していふに考へられる、《死後、人の魂 (Malaungu,

Sotomate) は、沈む太陽に導かれて、Choiseul 島、Ganonga 島 Vella Lavella 島、New Georgia 島などから、Simbo 島の休火山 Patokio の火口 (Kele Patokio) に集まつてゐる。人の魂は、この火口壁に、記念になる絵や記印をしつけて、火口に入り、穴を墜る。火口の穴から日出かへつて海に墜つたのがである。人の魂は再び海に出てカヌーを漕いで、Shortland 島の Sondo 村に行く》 (Simbo 島 Masulu) の伝承は、Vella Lavella 島、Ganonga 島 Choiseul 島などでも、ぜひ、パヘルルな形で採集されたのだ、西部ハロヤハ諸島にかなり普遍的な靈魂觀とみられる。Vella Lavella 島 Paramata の Lunga で発見された岩窟形式のスカル・ハウスの壁面に刻まれた、三人の帽子を被る人物を乗せたカヌーの浮彫は、死者の靈魂がカヌーで運ばれていく光景を表現してゐるものとみられる。(なお、この地域に舟葬の風習はないが、Malaita 島南部では、カヌーを棺にして死体を入れ、木の枝にぶら下さり、一定期間放置する風習があるところ)。

機縛：Vella Lavella 島 Paramata, Silas (六十九) の父の場合。《Silas が十四才の時、酋長であつた父が死んだ。父は、朝、父の兄弟たちと村の成人男子のみ二十人位で死者をカヌーに乗せ、沖合の小島 Omava 島へ運んだ。(Omava 島は酋長だけに許された墓地である)、女性は決してこの島に渡ってはならない) 死者を島の所定の位置に坐させて、頭部のみを出して、身体は石を積み上げて埋めた。埋め終ると直ちに村に帰つた。死者の靈魂はその後、地下に入り、Simbo 島の火山に行き、再び Bougainville 島に現

われる。通例、酋長が死んだ時、死者に対する犠牲として、首狩りでかかる。Veala あるいは、Choiseul 島の Sasamunga や、Santa Isabel 島にでかけ、戦いのすべ、敵の首をもちかへた。II～IV ケ月たつ後、朝、村の成人男子がカヌーにて、再び Omava 島にわたり、父の頭蓋骨のみをとりはせし、オジ（父の弟）の手によつて、Kilembambara 墓地（おもね Tanbuna）に運んで収めた。

その場所で、ブタを殺して犠牲とし、タロ、ヤム、ナツツをつぶし、アティングをせしめて余食をした。女性は、その場ぐ近くよむことができるなし。」あた Simbo 島 Masulu では、「人が死ぬと era とこうとしたるに家族の男性が、死者を運ぶ。era は海岸や、後背丘陵のブッシュの中において、特定の設備はない。死体を草のうねりに縛つて、坐葬にして、少し土をかけて覆う。埋葬後四日（Tekubatu）あたは八日後か一〇日後に Yama と呼ぶ呪師（男性の老人）が、Vonjavoi ふくらみの高い木の葉を手に持つて死者の頭部（Kokobe）をもじり切り取る。そして、頭蓋骨を海水で洗ふ。Vonjavoi の葉にくぬみ、竹（Kebu）にねし、Tanbuna おど連む、安置する。その時、男性のみが回行する。Tanbuna の前で、ブタを犠牲に供し、タロヒナツのアティングをやへざる。村に帰つてから村中のものが参加して余食する。その時踊りや歌をうたわない。この時 Yama は販賣一個を支払ふ。家族は翌日から仕事をしてもよい。その後はやへ era には行かない。」これでみるとこの地域の死者の埋葬法が明るいかに「重葬制をひつて」いることが知られる。すなわち、第一次埋葬地（era）は、海岸

や、後背丘陵のブッシュの中、沖合の小島などにあつて、何らの施設物をもたないが、第一次埋葬地には、頭蓋骨家屋や、配石遺構が構築されるのである。改葬の際には洗骨の風習がみられ、二次埋葬後にブタの供儀を行い、タロイモとナツツからつくられたアティングがやへざられる。一次埋葬が拡大家族を軸にした社会単位で行なわれ、二次埋葬後の儀式が村全体で行なわれる傾向がある。死者、聖域における女性に対する禁忌が非常に強い。性による区別は、Tanbuna ぬ体がもつてゐる場合があり、Simbo 島では、男性の頭蓋のみを置く遺構と女性だけを対象にしたものとを、別々に指摘し得た。Ganonga 島の頭蓋骨家屋では、女性の頭蓋骨が、男性の頭蓋骨の後方に置かれていた。このようにして二次埋葬を行なつた後では、一年に一回の祖先祭の形をとつて、村全体の行事の中で祭られる。Vella Lavella 島 Paramata では、「Hin（Tinabuna）は一年に一回の Sokesokeo あたは Singato 祭が屋間行なわれる。Tanbuna の前に、ブタや魚を供儀して食物と一緒にやへざる。その前に村中の男が集まつて食事をする。歌や踊りは行なはない。」あた Simbo 島 Masulu では、「十一月に、一年に一回の Linosite の祭が屋間行なわれる。村中の成年男子が、Tanbuna の前に必ず「ブタを犠牲にしてアティングをやへざる。Tanbuna の前では、火を焚き、アティングを火の中に入れし、火の煙を煙へおげる。」Vella Lavella 島の事例の中に、祖先祭と再生産観念との結びつけられてゐるといふのが、この祖先祭の行なわれる時期が五月と十一月におけることは、それらがソロモン諸島の気候を区分す

る時期に相当しており、注意を払う必要がある。すなわち、五月はこの地域が東南貿易風圏内に入り、ソロモン諸島の島軸に沿つて東南の卓越風が吹く。また十一月は、赤道常雨帯に入る時期であつて、風向は、逆になつて北西風が卓越するようになる。これは、彼らの交易活動、漁撈活動などにも重要な意味をもつておる、一年のサイクルに変化を与えるものであつたようである。なお、首狩によつて、もたらされた頭蓋骨は、祖先の場合と同じように扱われ、祖先祭も同じように行なわれる。(Simbo 島 Masulu) (以上のような頭蓋骨崇拜の観念は、キリスト教化した現在の住民にとって全く失なわれてはいるが、われわれが頭蓋骨に対し感じがちな一種の怖れはあるまいようである。そのようなところに、あるいは、生者と死者の一体感の観念が、感情の中にひきつがれているのかもしない。)

さて、このような機能をもつ、配石遺構が、オセアニアの巨石文化などのように結びついているか。巨石制をどのように構成しているかなどの考察は、本報告の機会にゆずりたい。

(三) 灌溉遺蹟の調査

対象：雛段状耕地遺構

調査地・New Georgia 島北端、Visu Visu 岬から東南約五マイルの山間、Lupa 河上流域。

調査期日：一九六四年九月二二日～二三日

遺蹟・New Georgia 島の北部、一二一七五フィートの標高をもつ

Vina Roni 山を中心にはらがる山塊の背梁が、島の北端 Visu Visu 岬へ向う根元にあたる山間部、Visu Visu に河口をもつ Lupa 河の渓谷には、多くの支流が流入して非常に複雑な地形をつくりだしていく。Visu Visu から約五時間のキヤラヴァンのすえに到達した遺蹟は、西流する Lupa 河に南から流入する一支流の合流点に位置する。二つの河流に狭まれたこの遺蹟は、平面プランにおいて、大略、頂点を北に向ける二等辺三角形を呈し、中心軸における全長は七八米、底辺にあたる北側の開口部で巾二六米を算する。全体にわたつて十二面の雛段状のテラスによつて構成され、北側の開口部に向つて傾斜をもつてゐる。中心軸は、開口部側の A 面から J 面までの十面を通して、ほど南北に一直線をとり、K・L 面にいたつて東側にずれてゐる。それぞれのテラスの縁は、直径十～十五粍の円礫によつて積み重ねられた高さ二十一～三十粍の落差を形成づつて、整然としたステップをなしてゐる。開口部のテラス A 面と、最上面の L 面とを結んだ傾斜は約二五度。両面の落差三米九十粍である。それぞれのテラスは巾九～六米、奥行二～三米の長方形で、フラットな面をもつ。しかし J 面は三辺を積石で囲まれた三角形を呈し、K・L 面もまた不整な三角形を示めしてゐる。A 面の開口部と、L 面の両側はそれぞれ本流と支流によつて浸蝕され、河床まで二・三米の高さの崖を作つて一方を断ち切られてゐる。東側は丘陵の裾斜面と接するが、そこは浸蝕によつて切りとられた如き非常な急斜面をなしており、とくに屈曲する L・K 面の東側斜面において著しい。また、各テラスの面は、腐蝕土、赤褐色土の下、深さ六十

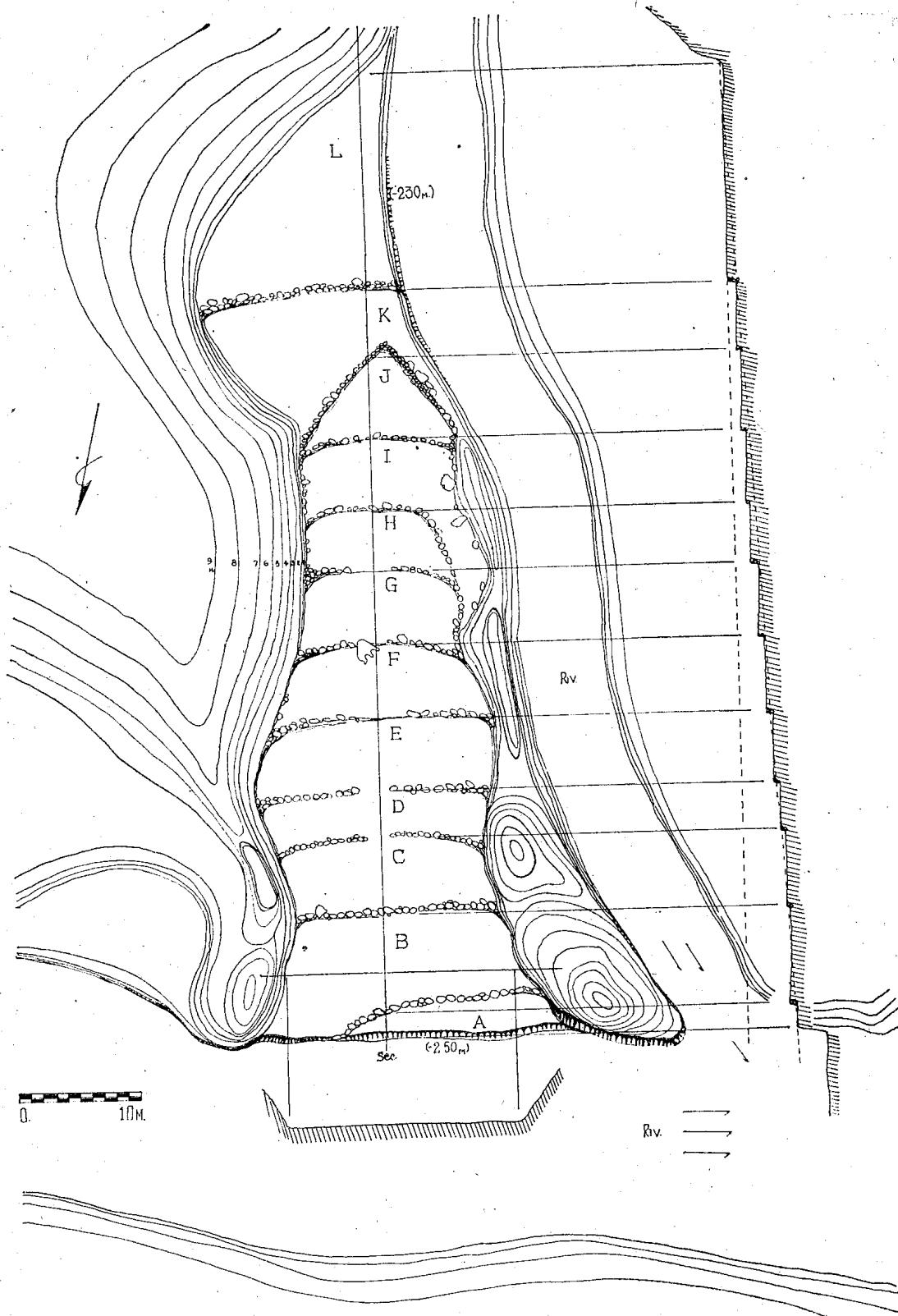


Fig. 4
New Georgia 島灌漑遺蹟

七十粍のレベルに、一様に径十五~二十粍の礫を含む小石と砂の層をベースにしている。以上の二点からみて、この遺蹟が、河流の旧河床に構築されたものであることがわかる。遺蹟の周辺は、直径一〇~十五粍の樹木を主体とした二次的生育林に覆われており、林床には、湿性羊齒類が一面にひらがって、非常に湿潤な環境を示めしている。

遺物：数ヶ所にピットを設け試掘を行なつたが、何らの遺物を探集するにいたらなかつた。しかし、Lupa 河本流の約一〇〇米上流の氾濫台地上において、高さ四~五粍、直徑三五粍の石製田を発見した。現在は密林に覆われてゐる山間の谷間が、かつては人間の居住地であったことは、Visu Visu 住民の口碑を聞くのを待つまでもなかつた。

性格：さて、この遺蹟の性格は何であろうか。我々がポーターとして連れていた原住民の唯一人として、畑だと答える以外に、この遺構について解答を与えることができるものがなかつた。この遺蹟の特長的な点は、整然とした雛段状をなしていること。河川の合流点に位置していること。旧河道に構築されていること。非常に湿润であることなどである。これらを考慮して推測されるのは、この遺蹟が台灣のヤム族におけるタロイモを作る階段耕作の水田（鹿野忠雄「紅頭嶼ヤム族と飛魚」太平洋協会編『太平洋圏一民族と文化』上 pp. 507~8）あるいは、ミクロネシアにおける進んだ水田構築の芋田（杉浦健一「ペラオ島民の芋田耕作」地理学研究 1.1021~2, 1942）などに類するタロイモ耕作のための雛段灌漑ではないかと

考えられることがある。古く Kulanbangara 島には、これに類した設備の存在することが知られており、Gizo 在住のイギリスの農政官 Leggety 氏はこれを実見していた。とすれば、本遺蹟における L 面の西側は、現在比高一・三米を有する浸蝕崖になつていて、明らかに流水の導入口にあたり、A 面の開口部は排水口をなしていられたと考えられるのである。なお、支流との間に狭まれた築堤は、かなり人為的な変形が認められた。New Georgia の Visu Visu ではタロイモの種類について乾畠に栽培するタロ Poli に対して低平な滞水地を栽培適地とする湿地性タロを区別し、後者はやわらかにいつやのある大きな葉をもつ Goheri と葉の小さな Veruhe に分けている。しかし、Lupa 河の下流湿地に僅かに栽培われてゐる。また Vela Lavella 及 Paramata では乾畠タロ (Inda) 八種 (Kirikiri, Goliti, Ruta, Voraihana, Midiazru, Bokue, Kapopuso, Pinapina) に対し、湿地性タロ一種 Lutu と Wopa が識別されてゐるが、現在では殆ど耕作しないようである。住民の話では味が落ちるといふことであり、外来種であるサツマイモや、タピオカが、これに置きかえられつゝあることを示めしている。このような湿地性タロイモを対象としたと思われる灌漑設備については、すでに現在の住民の記憶からは消え去つてしまつてはいるが、しかし、このような熱帯の多雨湿潤な地域にあって、季節的な影響を受けることが少なく、増殖性の高い湿地性タロイモの栽培は、かなり集約的な灌漑農耕によつて、非常に大きな人口支持力をもつていたのではないかと思われるのである。そして、雛段状耕地の構築が、巨石文

化と関係があるかどうかについては、文化史的に非常に大きな問題である。本遺蹟の性格が、その方面からも興味ある素材の一つであると考えられる。

(四) 洞穴遺蹟の調査

対象：洞穴遺蹟

調査地：Choiseul 島 Vurango, Sirebangara.

調査期日：一九六四年九月八日

Choiseul 島の西北端に近い Vurango 部落の北のはずれ、海岸

線に沿つて西北から東南にのびる高さ約三米の浸蝕崖の一角に開口した海蝕洞の一つである。洞穴は、下半部を堆積土によって埋没され、巾三米五十粁、高さ七四粁をあらわしているにすぎなかつた。

底面の土砂を除去し、側壁に刻線による壁画を見出し、拓本をとることができた。壁画は耳飾を施し、縮れ毛のメラネシア・タイプをよく表現した人物像である。遺物はよくに発見されなかつたが、この附近が、Bougainville 島、Shortland 島を含む土器交易圏に属していることから、遺蹟周辺において土器片の散布をみた。なお洞穴の北側について、直径三米に近い湧水があり、こゝに精靈が水浴にくくるといふ伝説があり、この洞穴遺蹟が、それと結びついたものであった可能性もある。同じ Choiseul 島 Papara で得た精靈観についてみると、精靈には、善いものと悪いものとがあつて、悪い精靈は、人を殺したりするが、良い精靈は家族の死者や、祖先がなるものであつて、人を保護し、病氣をなおり、作物を育てる。精靈

は部落の中を飛びまわつてゐるものであつて、呪術師 Matezana が病氣をなおす力を得るときには、腕輪をはめ、棍棒をもつて貝製の半月形のペンドントを首から胸にさげ、大きくあくびをして手を振りながら、次第に身体をふるわして精靈を呼び寄せる。

今回の調査において洞穴遺蹟の調査は、目標の一つとして発見に努力したにも拘らず、殆ど不成功に終つた。しかし今後、洞穴遺蹟は、(一)海岸に近い丘陵の裾。(二)海岸の石灰岩の洞穴。(四)溶岩噴出の際に形成された火山地帯における洞穴などに発見の可能性が残されていると思われる。

(五) 土器つくり部落の調査

対象：土器つくり技術とその背景

調査地：一九六四年九月七日～九日

部落の構成：Choiseul 島の北西端、Choiseul Bay を北東岸側に廻つて最初の村、Sirovana は、Pazu 河の河口を深く包む湾入部の左手に三つの集落から構成される。すなわち Sirovana, Penetale, Luluvato の集落のそれぞれにまたがつて成立しており、景観的に一つの村がまとまっているのではない。土器つくりはこのうちの Penetale で行なわれてゐる。Penetale は海岸から、マングローブの茂る Pazu 河に沿つて、約一秆奥へ入つた右手にある舌上台地の上に位置する。集落は教会と倉庫、カヌー・ハウスを含む一〇戸の家屋によつて構成され、集落型は景観的に古い型に属すると考えられる。Penetale は、この場合地名であり、こ

に住む住民は、自分達を他から区別するとき、通常 Senga ronboro といふ氏族名称を用いる。集落の構成人員は、全体で二八人。全住居のうち、五戸（家族番号11～7）に住む二四人は、TINGAI（♂六十才推定）と TANATARU（♀五十才推定）夫婦の息子または娘によって血縁的なつながりを持つ家族群によって構成されている。すなむち、TINGAI, TANATARU 夫妻は、未婚の娘三人と、次女の私生児とともに住み、その既婚の息子三人と娘一人がそれぞれ他の四戸を占拠している。土器（Sereke）の製作は、TINGAI の妻 TANATARU と Luluvato がいた PEATER（♂11十才）と結婚した長女 DOMATURA（11才）の一人の手に厳格にゆだねられている。たゞ粘土の運搬、製作の際の一部に、次女と三女の PAZAREKE（11才）と KOMBA（11才）が TANATARU を手伝い、時々 PEATER が妻 DOMATURA を助けることがある。

技術の伝承：TANATARU は10才の娘 Sanbarava と祖母から、土器つくりの技術を継ぐた。TANATARU は娘女 DOMATURA が10才になったころ、土器つくりを教えた。その時から他の娘 PAZAREKE, KOMBA も土器つくりを手伝うようになった。技術の伝承に際して、娘がいない場合には、息子の嫁にその技術を伝える。土器つくりは、このように母から娘へと伝えられるが、決して秘密にやるのではなく、伝えるための特定の場所はない。一年中何時でも作ることが出来、とくに作ってはならない時はない。また特殊な精靈などを信仰したりすることなく、特別の儀礼などももたない。

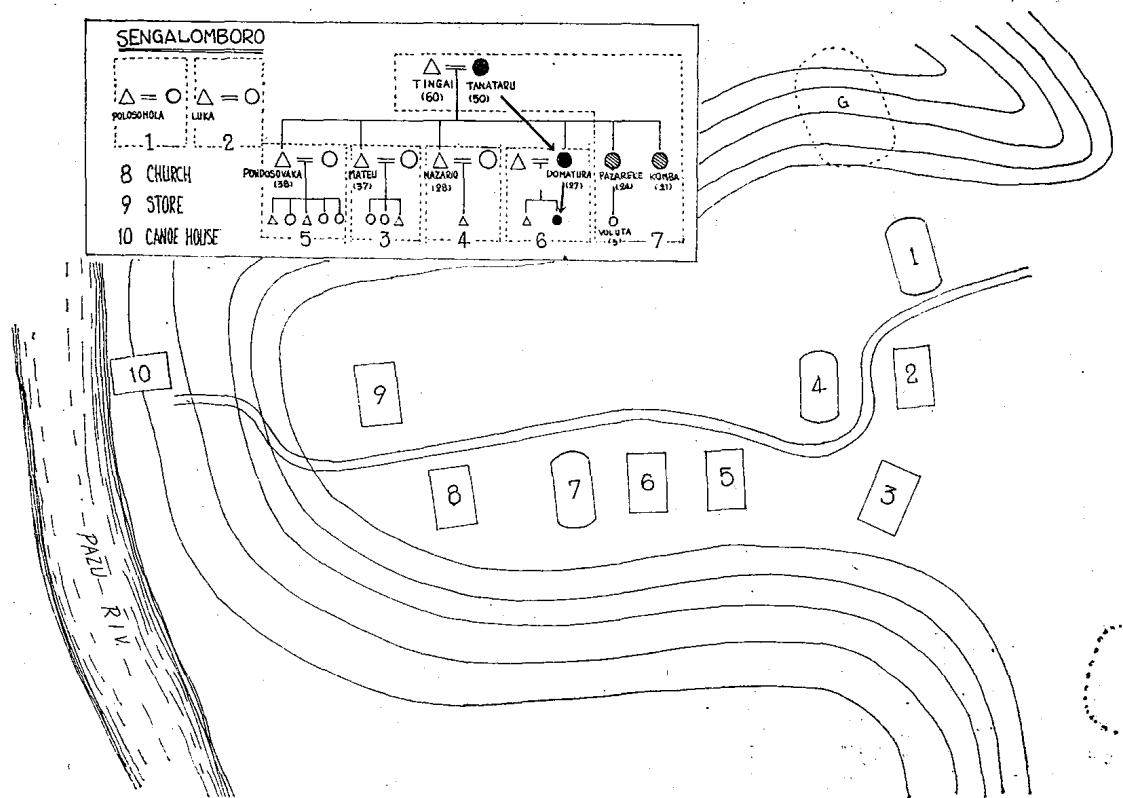


Fig. 5

Choiseul 島 Sirovana, Sengalomboro 土器つくり部落

土器つくり・材料は赤褐色の粘土 (Lua) 黒色の砂。道具は木製のパドル、直径十一糸の扁球形の平たい石が用いられる。粘土は部落から一マイル離れた密林の中 Nachu Nachu から採取する。粘土の採取は土器つくりをする女性だけに許されており、部落の他のものが自由にすることはできない。砂は、海岸の砂を用いる。製作は昼間、戸外で行なわれる。土器の形態は、すべて半球形を呈し、サイズにおいて大小二型式がある。大型のものは、高さ六十糸直径五十五糸、小型のものは、高さ三十糸直径一八糸前後である。製作は次のような手順によって進められる。(1) 赤褐色の粘土と黒砂を七・二一の割合で混合し、こねる。この時、他のものが手伝うことがある。(2) 粘土を平板状にのばしながら、四~五糸平方の厚さ七~八糸のメンコ状のものをつくる。(3) メンコ状の粘土板を三~五枚とつなぎながら、内側から、あて石をしながら静かにパドルで叩きながら、まず底部をつくる。(4) 粘土板を上方へ次第につなぎながら、内側にあて石をし、外側からパドルで叩いて次第に口辺部に及ぶ。この間に時々接続が、うまくゆかず、叩いていりうちにしばしば粘土板が脱落する。(5) 口縁部を竹べらで成形、刻目をつけ成形を終る。こゝまでの所要時間七十分、通常一日に三~四個作られる。(6) 家屋内の炉の近くに置いて、一ヶ月乾燥させる。(7) 乾燥の程度をみはからって焼成を行なう。焼成に際して特別な窯の設備はなく、家の前の広場の地面に薪を並べ、その中く土器を置き、約三十分間位、火を大きく起してその火が消えたときにとり出し、焼成を終える。家屋内の炉に土器を入れて焼成

する場合もある。(8) 焼き終つてからすゞに Sita とこう樹木の実の汁を塗り込んで黒色に仕上げる。Sita を塗り込むと水が浸透しない。土器は、タロやヤムなどを煮るために煮沸用として使用されるが、その時、鼎として Tantan と呼ぶ径五~十糸位の球形の石を三個、三点で支持して用いる。

交易関係：土器の売買は、通常、旦貨によつて行なわれ、小形のものが三 kesa (旦貨三個)、大型のものが五 kesa で売りわたされる。売りに出かけぬことはなく、買手が買い求めるにきて取引される。現在、Burango, Tamabato, Singa, Kokoengen, Kandova, Koroe などかい賣ふ求むるが、以前とは Sasamunga, Malagan からも求めにきた。これらでみると、その交易範囲は全て Choiseul 島西北の半分に限られている。Choiseul 島では、この他同じく西北部の Taula で土器の製作が行なわれている。

メラネシア文化史を考える上で、土器の果す役割はあわめて大きい。西部ソロモン諸島の地域内において、この Choiseul 島西北部における土器使用は、示唆に富んだ問題を投げかけていく。

(未完・以下次号)